

---

# 不幸も幸福なり

セウル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不幸も幸福なり

### 【Nコード】

N1128S

### 【作者名】

セウル

### 【あらすじ】

時季物です。

とある魔術の白井黒子と上条当麻を主体とした  
エイプリルフールの1日。

黒子はエイプリルフルを使って当麻を貶めようとするのだが……

(前書き)

色々と酷いですが、ご了承ください。  
極力キヤラ崩壊しないよう気をつけています。

## 黒子の場合

今日は4月1日ですの……

そう、お姉さまとのスキンシップが……

と、思ったのですけれど、

お姉さまは最近、上条当麻とかいっどこぞの馬の骨とも知らない類人猿と……

これは、4月1日をフル活用して、調べ上げなければ！

というわけで、早速。

「お姉さま」

「な、何よ。黒子」

嘘をつかれると思って身構えてる?!

キヤー!!!

お姉さま!!

抱きついて良いですか！

……。

落ち着きなさい、白井黒子。

それは夜のお楽しみですわ。

「上条当麻という殿方を存じませんか?」

「え? 知ってるけど……」

「実は、とある事件で追っているんですの。連絡先を教えてください  
んですの」

とある事件。

まあ、起こしていないんですけれど。

「事件?」

「ちょっと内密なことなので申し上げられないんです……」  
内密も何も、個人的理由ですの。

「し、知らないわよ。連絡先なんて」

「知ってますわよ？ お姉さまが殿方と電話していることくらいにやっとなんて聞く。」

実際、ストーク ゲフンゲフン。

実際、護衛の際、連絡をしているのを見ているんですの。隠し通せませんわ。

「ねえ、黒子」

「はい？」

あら、パチパチとなぜ？

「私が、出かけた時にストーキングしてるのかな？」

あ、笑顔が怖い。

こ、これは。

電撃が……

「み、見回り中にたまたま……」

「へえ……私いつもアンタが私の後ろに居るの見てただけど……

…それも？」

あつ。

言い逃れできそうに

「くゝろゝこゝー!!」

「あひゃん!」

美琴の放った電撃が、黒子を捕らえた。  
し、痺れるううう……

「……はいこれ」

「え？」

「あいつの連絡先」

「お姉さま……」

「私はアイツが事件起こさないうって思ってる。でも、黒子が嘘つくとは思えない。だから……」

りよ、良心が痛い……。

胸が締め付けられるっ！

お姉さまのあの悲しそうな表情……

ごめんなさい！ お姉さま！

「大丈夫ですよ。私が聴取して、無実にして見せますの」

「よろしくね？ 黒子」

いえいえ、上条当麻は私が死刑執行いたしますの。

お姉さまを渡すわけにはいかないんですの。

連絡先を受け取って、寮を出て行く。

「ここにかければ、良いんですのね？」

紙に書かれた連絡先へと電話をかける。

《はいもしもし〜？》

あれ？ こんな高い声ですか？

まるで、女の子……

《もしもして聞いてるんだよ？》

《あつ。白井黒子と申しますの。上条さんでよろしいですわね？》

《違うんだよ？ 私はインデックスだよ！》

……お、お姉さま。

まさか、こんなところで4月1日を？！

あの表情は演技？！

やられた……

《どうかしたの？》

《いえ、人違いなら構わないんですの。申し訳ありませんの》  
そう言って電話を切る。

ここにかいてあるのは家の番号だけ。

携帯は知らないんですのね……

しらみつぶしに探すしかありませんの。

「とりあえず、あの公園に……」

あの公園とは、お姉さまが蹴っている自販機の公園。

あそこで、数回目撃したことがありますの。

希望はありますの。

テレポートで、公園に行く。

……いない。

公園のベンチで一時間ほど時間を潰してみたものの、

一向に来る気配がないので、ここは無し。

「次は……レストランですわ」

店に入って、とりあえず、お昼時なので、食事しながら待つことに。

……。

一人でレストランだとなんだか涙が……

「あの……合席させて貰って良いですか？」

「え？」

「他の席が一杯だから、席がないんだよって」

2人の男女の声が聞こえた。

俯いているので、顔は見えない。

「別に、どうぞ」

とりあえず関係ないので、合席を許可する。

「とうま、とうま」。何頼んでも良いの？」

「高いもの以外はな」

「じゃあ、このハンバーグ」

「へえ、3000円ですか。上条財布の限界値は2000円ですよ

」

……？

当麻？

上条？

「あなた。もしかして上条当麻？」

「一応尋ねてみる」

「ん？ そうだ あつ、お前！ ビリビリの……」

「お姉さまとの関係を洗いざらい吐いてもらいますわ！」

そう言つて、黒子は当麻の腕を掴み、レポート…… 出来ないので

「……とうま？」

「行きますわよ！」

「わあああああ」

腕を引つ張つて店を飛び出した。

インデックス放置のまま2人は土手に来ていた。

「いきなり何すんだよ！ インデックスも置いてきちやったし！」

「お答えするんですの！ 貴方はお姉さまのなんなんですか？」

殿方を睨んで、威嚇する。

「ん？ 恋人だけど、なにか？」

え？

こ……え？

こいびと？

恋人？

「そ、それは本当ですか?!」

「ん？ 本当だ」

くつ、まさか、すでに恋人だとは……

ですが……

「あのインデックスという少女は何なんですの!」

「あれは、単なる居候だ」

「二股ですね?!」

「違っつて!」

「このことはお姉さまに報k」

「わー待て待て!」

「え? きゃあ?!」

「うわっ」

当麻が、急に抱きついてきた為、

バランスを崩した黒子が倒れ、その上に当麻が倒れこんだ。

「は、早くどくんですの……」

右手が、触れていて、テレポートが出来ない。

逃げられない……

「報告は止めてくれ」

「いいからd」

「良くない!」

「え?」

急に怒鳴られても……

「お、俺はお前が好きなんだ」

「へ?」

え?

あれ?

なんて?

私が好き?

誰が?

上条当麻が?

私を?

「ほ、本気なんですか？」

な、なんかドキドキ……

だ、駄目ですよ！

落ち着くんですよ！

「ああ。本気だ」

真剣な眼差し……

で、でも……

「お姉さまは……」

「恋人つてのは嘘で、お前の驚く表情が見たかったんだ」

「そんな……」

「な？ 頼む。言わないで欲しい」

「わ、私をす、好きと言うのは？」

「ほ、本当だ」

「な、なら……考えておきますわ。とりあえず、どいて欲しいんです」

当麻がどいた瞬間、レポートして寮へと逃げる。

……。

心臓の鼓動が……

通常の倍くらいで……

私、動揺してる。

あの殿方の言葉に？

ち、違うんですの。

これは、お姉さまをあの方が騙していたことに……

でも、恋人は嘘なのですから、騙しては……

ああああ！！

どうしたら！ どうしたらあ！

ベッドで黒子は悶えていた。

## 御坂の場合

「お姉さま」

「な、何よ。黒子」

抱きついてきたら、ビリビリに……

「上条当麻という殿方を存じませんか?」

「え? 知ってるけど……」

なんで?

黒子がアイツを……

「実は、とある事件で追っているんです。連絡先を教えてください」

とある事件?

「事件?」

「ちょっと内密なことなので申し上げられないんです……」

内密って、またなにかに巻き込まれたってこと?

「し、知らないわよ。連絡先なんて」

「知ってますわよ? お姉さまが殿方と電話していることくらい」

……なんで?

「ねえ、黒子」

「はい?」

「私が、出かけた時にストーキングしてるのかな?」

「み、見回り中にたまたま……」

見回り、へえ……見回りねえ?

「へえ……私いっつもアンタが私の後ろに居るの見てただけ……」

……それも?」

微笑んで黒子を見つめる。

「く〜ろ〜こ〜!〜!」

「あひゃん!」

美琴の放った電撃が、黒子を捕らえた。

「……はいこれ」

電撃のせいでビクビクと震えている黒子に紙を渡す。

「え?」

「あいつの連絡先」

家の電話番号しか知らないけど……

「お姉さま……」

「私はアイツが事件起こさないって思ってる。でも、黒子が嘘つくとは思えない。だから……」

「大丈夫ですよ。私が聴取して、無実にして見せますの」

「よろしくね? 黒子」

あの馬鹿……

私も出かけよう。

もしかしたら、あいつと会えるかもしれない。

黒子が出てから10分後、美琴も寮を出て行った。

とりあえず、って……

暫く歩いていると「私」がいた。

私と言っても、

クローンとして作られ、

レベル6への進化の為に殺され続けた。

今は、今私が探している上条当麻のおかげで  
進化実験も中止になっている。

それはさておき、

「ちょっと」

「どうかなさったのですか？ とミサカは尋ねます」

「何してるのよ。こんなところで」

「上条当麻とシヨッピンングを楽しんでいました。と袋を見せつけながら言います」

あんの馬鹿……

「今回は誘われた。とお伝えしておきますとミサカは真実を語ります」

「誘われた？」

「お前が好きだから、デートしたいと言われ先ほど別れた。と、いつておきます」

好き？

な、なんで動揺してるのよ……

どうだって良いじゃない、あんなやつ。

「い、いつ言われたの？」

「今朝、告白され、キスしました。と若干頬を染めつつ説明します」

「どっち行っただの？」

「向こうです。とミサカはお姉さまが来た方向と逆を指差して言います」

「ありがとう。じゃ、また」

ミサカに言い、走っていく。

「……………」

急げば追いつけるかも。

どうしてあげようか。

ビリビリに？

勝負しかける？

……………。

馬鹿だ。

走るのを止めて、トボトボと歩く。

いつも……

勝負だなんだって変な方向に行っちゃう。

私はただ、あいつが……

なんで、素直になれないんだろ。

ミサカは正直になれてるのに、

どうして、私はいつも余計なことを。

照れ隠しとか……馬鹿みたい。

「あれ？ ビリビリ？」

「へ？」

「あつ。短髪なんだよって……」

「アンタ……それと……」

「前に自己紹介したんだよ？ インデックスっていうんだよ？」

「インデックスと当麻……」

今、一番会いたくないのに……

でも、もう遅いんだっけ。

なら、

「ね、少し2人してくれない？」

「え？」

「私、こいつと話があるから」

「解ったよ。終わったら呼んで」

インデックスはその場から立ち去った。

意外と人の居ないこの道。

ここなら。

「んで？ また勝負とか？」

「違う」

私は、正直になる。

今さらだとは思っけど。

ミサカをこいつは好きなんだ。

私じゃなくて、ミサカを。

なら、言ってもいいよね？

言うだけだから。

「私、アンタのこと好き……なの」

「へ？」

「でも、アンタはミサカ妹が好きなんですよ？」

涙が、滴る。

「アイツのこと、よろしくね！」

「おい、ちよっ」

夢中で走り出す。

能力を使って、走る速度を変え、

目にもとまらぬ速さでそこから離れる。

なんで、なんでなんだろう……

いつもの公園に行く。

誰も居ないベンチに腰掛けると、誰かが居たのか人肌の温もりが残っていた。

その横に座って、その部分をなでる。

前に一度、隣にアイツがいたんだっけ……

その時は、まだ何とも思ってた。

ううん。少しは意識していたけど……

進化実験の時、私は本当にコイツが好きなんだって思って……

なんでだろ……

私。正直になるのがもう少し早かったら、きっと……

## ミサカの場合

「これください」

「ありがとうございますー」

私は、ミサカです。

オリジナル  
御坂美琴ではなく、

ミサカ10032号です。

上条当麻は私をミサカ妹と呼びます。

買い物内容は、上条当麻に貰ったペンダントのお返し。

一応、返さないといけない。と、ミサカは思ったので。

店から出て、暫く歩いていると、

「ちょっと」

振り返ると、オリジナル御坂美琴が走りよってきた。

ここは、4月1日。

エイプリルフルというものを試してみよう。と、心に秘めてみま  
す。

「どうかなさったのですか？ とミサカは尋ねます」

「何してるのよ。こんなところで」

「上条当麻とショッピングを楽しんでいました。と袋を見せつけな  
がら言います」

もちろん嘘ですが。

「今回は誘われた。とお伝えしておきますとミサカは真実を語りま  
す」

真実ではなく嘘です。と、エイプリルフルなので心で言います。

「誘われた？」

「お前が好きだから、デートしたいと言われ先ほど別れた。と、い

つておきます」

お姉さまが上条当麻を好きと知っているので、  
もっとも効果的な嘘。と、個人的見解の上で言ってみました。

「い、いつ言われたの？」

「今朝、告白され、キスしました。と若干頬を染めつつ説明します」

「どっち行っただの？」

「向こうです。とミサカはお姉さまが来た方向と逆を指差して言います」

「ありがと。じゃ、また」

美琴はミサカに言い、走っていく。

「……………」

ちよっとやりすぎたのでは？

と、不安になるものの、

エイプリルフルということに気にせずには私は上条当麻の家へ向かいます。

……………。

「居ませんか？ と、ベルを鳴らして声をかけてみます」

……………。

「残念ながら居ないようなので、ポストに手紙と共に投函しておきます」

任務完了。

撤退しますと、達成感に浸りながら、私は帰ることにします。

#### 上条当麻の場合

「出かけるの？」

「夕飯の材料すらないからな」  
「え？ お昼は？」  
「レストランでいいだ」  
この時、電話が鳴った。  
傍に居たインデックスが、受け取る。

《はいもしもし？》  
反応がない？

インデックスなにしてんだ？

《もしもして聞いてるんだよ？》

《違うんだよ？ 私はインデックスだよ！》

《どうかしたの？》

インデックスの声しか聞こえない  
相手は？

「おい、インデ……」

「切られちゃったんだよ？」

……俺が出ればよかった。

嘆いても仕方がない。

さっさと、

「レス」

「こもえのところにはまず行くんじゃないの？」

あつ……

そういえば。

課題があるから取りにきなさいと  
ぐふつ。

「一緒に行くつよ」

「はいはい」

ものすごく鬱なんです。

20分程度あるいて、小萌先生のいるボロアパートへたどり着いた。「せんせ〜い。馬鹿なかみじょーさんが課題を受け取りに来ましたよ〜?」

呼んでみると、部屋から声が聞こえた。

……課題。

なんで?

もう、新学期なのに。

あれ?

ちよつと待てよ?

まさか。

「え? 本当に来たんですか?」

ドアを開けて早々のお言葉。

「先生。まさか、あれですか?」

念の為、聞いてみる。

「そうですね、かみじょーちゃん。今日は4月1日なのですよ。」「やっぱりかー」

小萌先生が驚きの表情から、満面の笑みに変わる。

「まんまとしてやられましたよ」

「いつも、補修のかみじょーちゃんがいけないのですよ」

「つてことは、何にもないんですよね?」

「はい。ないですよ?」

そういうことならと、先生に別れを告げて、アパートを後にした。

「……レストランへ行こうか」

正直、自棄であるが気にすることはない。

ここでまた、意味の解らないことに。

前から、ビリビリ中学生こと、御坂美琴さんが現れたのでした。

「あれ？ ビリビリ？」

「へ？」

「あつ。短髪なんだよって……」

「アンタ……それと……」

「前に自己紹介したんだよ？ インデックスっていうんだよ？」

「インデックスと当麻……」

？

なんか、元気ないような……

「ね、少し2人にしてくれない？」

「え？」

「私、こいつと話があるから」

「解ったよ。終わったら呼んで」

インデックスはその場から立ち去った。

「んで？ また勝負とか？」

「違う」

まさか、

こいつもエイプリルフールで騙す気だな？

悪いけどだまされん

「私、アンタのこと好き……なの」

「へ？」

「でも、アンタはミサカ妹が好きなんですよ？」

俯いていて顔が見えないけど笑ってやがるな？

「アイツのこと、よろしくね！」

「おい、ちよっ」

呼び止め空しく、

目にもとまらぬ速さで美琴は走っていった。

「嘘だと言われないうちに逃げるとは。ビリビリめ」

「とうま〜」

「インデックス？」

「短髪が走っていくのが見えたから」

まあ、好きとかどうとかどうでも良いか。

エイプリルフルだもんな。

「んじゃ、レストランいこうぜ」

「うん！」

不幸だー！

「満席なんですけど、あちらのお客様と合席でしたら……」

レストランは超満員。

まあ、ものは試しということだ、

「あの……合席させて貰って良いですか？」

「え？」

「他の席が一杯だから、席がないんだよって」

この子どもで見た気が……

「別に、どうぞ」

許可してもらえたので注文を

「とうま、とうま〜。何頼んでも良いの？」

「高いもの以外はな」

「じゃあ、このハンバーグ」

「へえ、3000円ですか。上条財布の限界値は2000円ですよ  
金下ろせばよかった。」

「あなた。もしかして上条当麻？」  
ん？

「ん？ そうだ あっ、お前！ ビリビリの……」

「お姉さまとの関係を洗いざらい吐いてもらいますわ!」  
思い出した! 白井黒子!  
つて?

何故腕をおつかみに?

「……とうま?」

「行きますわよ!」

「わあああああ」

腕を引っ張られ、俺は誘拐された。

すまん、インデックス。サイフ置いてあるからかってに頼んでくれ

……

インデックス放置のまま2人は土手に来ていた。

「いきなり何すんだよ! インデックスも置いてきちやったし!」

「お答えするんですの! 貴方はお姉さまのなんなんですの?」  
何で睨むんですか?

この人は。

「ん? 恋人だけど、なにか?」

ちよつと俺もエイプリル fools させて頂こう。

すまん、ビリビリ。

「そ、それは本当ですの?!」

「ん? 本当だ」

予想以上に食いついてきたな。

「あのインデックスという少女は何なんですの!」

「あれは、単なる居候だ」

「二股ですのね?!」

二股?

いやいや、あれはただの居候だし。

「違つって!」

「このことはお姉さまに報告  
それは不味いつて！」

咄嗟に、腕を掴もうとしたが、ここは不幸な上条さん。

「わー待って待て！」

「え？ きゃあ?!」

「うわっ」

見事にミスって抱きつく形に……

当麻が、急に抱きついてきた為、

バランスを崩した黒子が倒れ、その上に当麻が倒れこんだ。

「は、早くどくんですの……」  
やばい。

ちよつと可愛い。

「報告は止めてくれ」

「いいからd」

白井って意外と可愛くないか？

「良くない！」

えっと、つい怒鳴っちゃまった。

どうする？

どうすれば。

「え？」

もう、なるようになれ！

「お、俺はお前が好きなんだ」

「へ？」

言ってしまった。

正直なところ、

好きかどうか解らない、

有耶無耶な状態なんだけどな。

「一目惚れ。と、ここは言っておこう。」

「ほ、本気なんですか？」

あ。

白井が赤井になってる。

やっぱり可愛いじゃないですか。

「ああ。本気だ」

うん。これ、嘘じゃなくなってきた。

「お姉さまは……」

「恋人つてのは嘘で、お前の驚く表情が見たかったんだ」

実際、恋人つて嘘だし、

驚く表情は見たかったしな。

「そんな……」

「な？ 頼む。言わないで欲しい」

「わ、私をす、好きと言うのは？」

「ほ、本当だ」

焦ってる白井……

やばい、マジでやばい。

「な、なら……考えておきますわ。とりあえず、どいて欲しいんですの」

俺がどいた瞬間に、テレポートして、白井は逃げていった。

……。

「白井……か。実際に好きになったのか？」

自分に聞いてみる。

多分そうなんだろ。

って答えが返ってくる同時に、

「と~~~~ま~~~~！」

うげっ……

「置いていくなんて酷いんだよ！」

「ちよつ、不可抗力！」

「問答無用なんだよ！」

「ぎゃああああああ」

噛み付かれた痕が、全身に刻まれた。

「結局、昼飯食べてないから夕飯を盛大に食おう」

「……焼肉」

「はいはい。りょーかい」

インデックスさんに逆らうと面倒なことになりそうなので従っておく。

夕日が沈む頃に、買い物を終えて家へと向かっていた。

#### 再び黒子の場合

悶えてた私はいつの間にか眠ってしまったようだった……

気づけば、外はしっかりと暗くなっていた。

「白井！、御坂！」

寮監の声に反応して、扉を開ける。

「白井、御坂はどうした」

「いえ、わかりませんですの」

「罰則を覚悟s」

「構いませんですの」

「なに？」

気づいたことがある。

今日はエイプリルフル。

最初覚えていて、けど、

忘れてしまっていた。

あの上条さんの言葉は嘘。  
必然的にそうなる。

「白井？」

「寮監さま……エイプリルフルに告白されたらどうすれば？」  
聞いてみる。

「は？」

「私は、それを嘘だと決め付けたくはありませんの。けど、4月1日という鎖が……」

「そんなの、知らん！ と、とにかく、御坂を呼んで来い！」  
ですよ……

「はい」

「……答えるなら、その日のうちが良いんじゃないか？」

「え？」

「さっさと行け！」

「はい！」

普段は呼んで来いなどとは言わず、  
待機が普通。

なのに、寮監さまは……なら。

今朝の電話。

あの人が居候なら、

たまたま、あの子が取っただけ。

紙は捨てていたものの、

発信履歴には残っている。

電話をかけると、発信音が続く。

10秒。20秒。

諦めようとしたとき、

ガチャッと、繋がった。

《もしもし、上条ですが》

《えっと、私。白井ですけど……》  
また、心臓が早くなつていく。

《あ、ああ。えっと、なんだ？》

《お話したいんですの》

《……今？》

《はい。あの公園で待ってますの》  
そう言つて一方的に電話を切る。

彼の返事は待つてない。

こなければ、エイプリルフル。

来ても、嘘ならエイプリルフル。

どちらにせよ、嘘。

でも、来て。

私の言葉に彼が頷いたなら……

一足先に歩いていき、

公園のベンチで待つ。

「来て……くれませんわね」

電話してから20分。

一向に来る気配はない。

でも、遠いから時間がかかる。

そう言い聞かせて、

いまだ寒さ残る四月。

夜の公園のベンチに私は座っている。

「おゝい。白井！」  
来た。

来てくれたのに、動けない。

足が震える。

寒いから？

違う。

怖いからだと思う。

「えっと、あの……」

「話って？」

「昼の……土手での話です」

がさつと草が揺れたが、気にしない。

「え？ ああ。」

そう言った瞬間、彼は私から目を逸らした。  
嘘だから？

真剣になった私に、罪悪感を抱いたから？

そんなのどうでも良いですの。

「私、聞きたいことがあるんですの」

「ん」

彼は頷いただけ。

「あれは、エイプリルフルということでの言葉ですの？」

単刀直入。

変に捻じ曲げたり、

遠まわしには聞かない。

聞きたいことを直球で聞く。

「……」

黙っているのが、怖い。

嘘だということを知り出せなくて迷っているのだと感じてしまっ。

早く、早く、早く。

急かしてしまいそうになる自分を押さえつける。

貴方の時間を待つ。

教えて欲しい。答えて欲しい。

「それに、エイプリルフールは関係ない」

「え？」

「いや、初めはあった。最初は冗談のつもりで、御坂と恋人と言った」

「やっぱり、あれは嘘……」

「で、白井に好きと言ったのも、初めは御坂への報告をさせない為だった」

「ということ……」

「いや、白井に本気かどうか聞かれた時に、思ったんだよ。可愛いって一目惚れってやつかな？」

小さく彼は笑って続けた。

「馬鹿みたいだけど、俺は今日、あそこで、お前を好きになった」  
風が勢い良く吹き付け、荒々しい音が響く。

え？

つと聞き返すことすら、出来なかった。

なんなのか良く解らない感情が、浮き出てきた。

「待って！」

え？

「おま」

私の後ろから聞こえたのは、

私の憧れている人の声。

振り向いて、絶句に近い感じに陥った。

「待ちなさいよ」

「御坂？　なんで？」

「アンタ、ミサカ妹が好きって言ったじゃない！」  
え？

彼を見ると、動揺しているのが、目に付いた。

「そんなこと」

「私は本人から聞いたのよ?!」

「けど……」

あれ？

向こうでこっちおいで、と

やっている人影が視界に飛び込み、私は2人の喧嘩から抜け出して向かった。

「お姉さま？」

「いえ、私はミサカ妹です。と、否定します」

「上条さんが好きって言ったのは事実ですよ？」

「もちろん。嘘です。と私はあの2人の喧嘩を見ながら言います」

「え？」

「つまり、エイプリルフルで言ったのですが不安になり、探していたところ、この場面に出くわしました。と説明します」

じゃあ、嘘だつてこと……

ほっと胸を撫で下ろす。

「貴女も彼が好きなのですね？ と、聞いちゃいけないのに聞いてしまいました」

「なら、聞くな。ですの。とりあえず、いきますわよ」

「え？」

ミサカ妹の腕を掴み、

当麻と美琴の間に転移する。

「あつ、あんた……」

「ミサカ妹！」

二人が同時に、ミサカ妹を指差す。

「まず初めに、お姉さまへ伝えた上条当麻に関する事象は全て嘘です。と謝ります」

「え？」

「次に、上条当麻にあの時のペンダントのお礼は受け取りましたか？ と聞いてみます」

「あ、ああ。あの置物なら部屋に飾ってある」

「良かった。と言い。私はたちs」

ミサカ妹の腕を美琴が掴む。

「アンタねえ、あれ。嘘だったの？」

「はい。と、私はお伝えします」

「アンタのせいで、私告白しちゃったのよ?!」

「え？」

「え？」

「え？」

私と、上条さん、そして当の本人が驚いて「え？」と言う。

「ビリビリ……あれ、まじだったのか?!」

「お姉さま……」

今のうちに、と逃げるミサカ妹を無視して続ける。

「なら、上条さん。お姉さまをお願いいたしますの」

そう言っつて、黒子が走っつていった。

#### 再び上条当麻の場合

「……」

黒子が走っつていったのを、

俺はただ、見ていることしか出来なかった。

深い闇の中で沈黙を守っていた俺たち。

しかし、御坂は唐突にそれを破った。

「行ってよ」

「は？」

「アンタは黒子が好きなんですよ？　なら、追いかけてくださいよ」

御坂は俯いて言う。

表情が見えないのがきになる。

「御坂」

「私は同情で得た恋なんて欲しくない。私はアンタを好き」

顔を上げた御坂は泣いていなかった。

逆に、笑っていた。

「けどさ、黒子はアンタが好きで、アンタも黒子が好きなんだから行きなさいよ」

「でも。お前……」

「いいからいけつつつてんでしようがー！」

いつも通り、放電し、当麻を攻撃する。

「……行きなさいよ。アンタの意思を私は尊重するんだから。これ」  
当麻に黒子の携帯番号を走り書きした紙を渡す。

「すまん！」

走っていく当麻を見送る。

「あーあ。またやっちゃった」

笑顔でそう言った少女の表情は、

徐々に歪んでいき、

いつの間にか、泣いていた。

「白井……」

テレポーターである彼女を見つけるのは至難の技。なら、御坂のくれた番号に電話するしかない。

急いで携帯を取り出して、電話をかける。

流れてくるのは、電源が切れているという言葉だけ。

「どこに行きやがった?!」

公園の外。

夜の23時近くなっており、歩いている人は殆ど居ない。

「白井ー!」

大声で呼んでも、返事がくるどころか、

煩いと怒鳴られ、ものが飛んでくるだけだった。

最後の手段を使うしかない。

本当は駄目なのだが、

常盤台女子寮に向かうことにした。

寮監にでくわしたらどうなる?

正直怖い、仕方ない。

バスに乗っている間、

なんて言うかを考え続ける。

バスが止まり、降りると正面には女子寮が聳え立っていた。

硬く閉ざされた扉を叩く。

寮監が出てくるだろうが、もう知ったことかと、

叩いていると、

鍵が開き出てきたのは、予想通り寮監だった。

「なんだお前は?」

睨む目が怖い、息を吸う。

「白井に会いに来ました」

「白井は帰ってないぞ」

「……え？」

「御坂を呼びに行かせたままだ」

「じゃあ、まだ……」

「すいません。なら、良いです。お騒がせしました」

会釈し、走り去る。

それを見送った寮監が振り返って呟く。

「いいのか？白井。彼は白井を追ってきたんじゃないのか？」

それはただの独り言だった。

目の前には誰もいないのだから。

ただ、口の開いたペットボトルが、机の上に2つ置いてあるだけだった。

「お、遅れました……」

バスから一人の少女が降りてきた。

「覚悟は良いな？ 御坂」

「は、はひっ」

御坂はこの後、色々とあるのだが、それはまたの機会に。

一方、当麻は。

「白井……どこに？」

クレープ屋がある広場で、ベンチに腰掛けていた。

走り回った為か動けそうにない。

携帯を取り出すと、デジタルな数字は全て0になっていた。

4月2日。

エイプリルフールは終わった。

同時に、

「上条さん」

鬼ごっこも終わった。

「なんで、私を追うんですの？ お姉さまは遠慮されて……」

「そうかもしれないな」

「ではなぜ?!」

「俺は俺の意思を尊重した。同情愛ではなく、本心愛を選んだ」  
自分で言ってる物凄く恥ずかしいのだが、

そんなのは、小さいことだ。

「俺は、白井が好きなんだよ。御坂ではなく、白井黒子が」

「……」

「お前はどうかんだよ。教えてくれ」

後ろに立つ黒子に当麻は尋ねた。

「私は……」

黒子は、当麻に尋ねるばかりで、

自身の言葉を一切伝えてはいなかった。

「私は解らないんですの。貴方に好きと言われ、ドキドキした」  
深呼吸し、黒子が続ける。

「私は、それが嘘ではないと聞いて良く解らない感情に埋め尽くさ  
れた。嬉しい？ 悲しい？ 罪悪感？」

「……」

「でも、解ることがあるんですの。私は貴方が公園で好きだと言っ  
てくれたとき、嬉しかった」

「し」

「私も、好きなんですの……エイプリルフルという力かもしれま  
せんが……」

そっと背後から、当麻に抱きつく。

「この1日で、私は貴方に惹かれたんです。理由はなく、ただ、好きになっただんです」

「白井？」

「白井なんて呼び方はしないで欲しいんです。もし、私とお付き合っていていくおつもりなら、黒子。そう呼んでくださいな」

後ろを振り向くと、黒子は消え、

視線を前に戻すと、目の前にいた。

「上条さん。貴方の言葉は？」

微笑む黒子は街灯に照らされ、輝いていた。

けれど、俺には街灯などただのお飾りに思える。

ベンチから立ち上がり、黒子を見つめる。

俺のほうが背は高くて、

黒子の上目遣いが見れた。

少々、恥ずかしいのだが、

周りに人がいないのでよしとしよう。

「その、なんだ。黒子。俺と、付き合ってくれるか？」

「喜んで」

二人同時に微笑み、キスをする。

誰も居ない、クレープ屋の広場の中心で。

まるでそこは世界の中心のようにも感じた。

「じゃ、また明日」

「はい」

彼女を女子寮に送り届け、

家へとついた俺はある失敗に気づいた。

黒子に呼ばれた俺は、急いで着替え、急いで出てきた。

つまり、焼肉は食べていない。

準備を終えたところで出てきたのだ。

「とうま〜もう無くなっちゃったんだよ〜?」

居候の銀髪シスターは、肉のみを綺麗に平らげていた。

けれど、なんとなく、不幸だとは言わなかった。

「とうま? 何で笑ってるの?」

「お前には到底理解できない幸福があったからだよ」

そう言っつて、野菜を炒め野菜炒めでご飯を食べることにした。

「とうま〜少し欲しいかも」

「駄目。この幸福は俺だけのものだ!」

この後、取り合いになって、

上条当麻に不幸が降りかかるのは言っつまでも無い。

けれども彼は、どれも不幸だとは感じないほどに幸せだった。

(後書き)

長くて、申し訳ないです。

連載にして分けるのも視野に入れていたのですが、  
短編にしました。

感想等頂けると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1128s/>

---

不幸も幸福なり

2011年10月8日14時26分発行